75年前、戦火のフランスで交錯した二つの《日本》

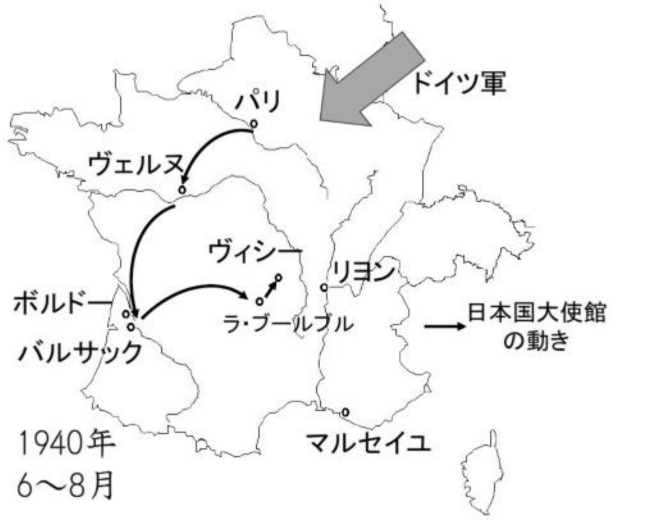
在フランス日本国大使館参事官　**有利　浩一郎**

フランスの保養地ビアリッツでG7サミットが行われているであろう2019年8月25日。この日は、第二次世界大戦中の1944年、ドイツ占領下のパリが連合国軍に解放されてからちょうど75年目の節目に当たる。今もフランス人の心を陰に陽に揺さぶる、この《ラ・リベラスィオン》(解放)*1、実は、戦争に翻弄された二つの《日本》の交錯を、1944年、この異国フランスの地に描き出してもいる。

話は数年遡る。1939年9月、ドイツ軍のポーランド侵攻から始まった第二次世界大戦は、1940年5月10日、ドイツ軍のベルギー・オランダ・ルクセンブルク攻撃で重大な局面に陥る。マジノ線を迂回し進撃を続けるドイツ軍。6月10日、フランス政府はついにパリからトゥールに移動、無防備都市を宣言したパリは、6月14日、ドイツ軍の手に陥ちる。ヒトラーは、6月21日、1918年11月に第一次世界大戦の休戦協定が結ばれたパリ北東のコンピエーニュの森に現れる。フランスにとって屈辱的な休戦協定の調印をその翌日に行わせるため、22年前にドイツ敗北の休戦協定を調印した同じ鉄道客車が、記念保存館を破壊して引っ張り出され、当時の調印場所と同じ場所に据えられていた。

ドイツがフランスに侵攻したとき、日本とドイツは共産主義に対する防共協定を結んでいたのみ。まだ同盟と言える関係にはない*2。だから、フランス政府がパリからトゥールに移った翌日の6月11日、パリの日本国大使館も、邦人保護のための領事業務とその担当者をパリに残しつつ、ドイツ軍に追われる形でトゥール近郊のヴェルヌ（Vernou-sur-Brenne）に移る。6月16日にはボルドー近郊のバルサック（Barsac）に移るがその途中、一行はポワチエ（Poitiers）でドイツ軍機の爆撃にも遭っている。

そして、独仏休戦協定調印後の6月30日に、オーベルニュの温泉保養地ラ・ブールブル（La Bourboule）に、7月6日には政権が樹立されたヴィシーの隣町キュセ（Cusset）に、そして、8月24日にヴィシー（Vichy）市内に移り、やっと腰を落ち着けるのである*3。



1940年の状況（国境線は現在のもの）

＊1）パリの街を歩いていると、そこかしこに、レジスタンス、自由フランスの兵士そして一般市民について「(氏名)、1944年8月何日、ここでパリ解放のために散りぬ（Ici est tombé pour la Libération de Paris le XX août 1944《Prénom》《Nom》」といったプレートが見られる。一方で、ドイツ軍の占領中、ドイツ軍やヴィシー政権に協力したフランス人は裏切り者の意を込めてCollaborateur（協力者）とか略してコラボとかと呼ばれ、解放後、徹底的に糾弾されている。

＊2）ちなみに、第二次世界大戦前のフランスにおける日仏関係であるが、1931年の満州事変以降、フランスでは日本に対し英米ほど厳しい見方はされず、日本との関係強化の動きもあったとされる（和田桂子・松崎碩子・和田博文編「満鉄と日仏文化交流誌『フランス・ジャポン』」（ゆまに書房）5頁）。一方で、日本に批判的な見方もあり、1933年に日本が国際連盟を脱退し、国際的孤立の懸念が高まると、日仏関係親善のため、1934年、（1）東京結成の日仏同志会のパリ支部と南満州鉄道パリ事務所の共同仏語宣伝誌「フランス・ジャポン」が創刊され1940年4月まで発刊が続けられたり、（2）在仏日本人が発起人となり、明治政府に招聘され日本近代法学の礎を築いたギュスタヴ＝エミル・ボアソナード＝デュ＝フォンタラビ博士の胸像がパリ大学パンテオン校舎（現パリ第一大学・パリ第二大学）に立てられたりもした（法政大学ホームページ「ボアソナード博士 胸像物語」）。筆者は20年前、パリ第二大学留学時に、ボアソナードの像を発見して感動したのだが、像に「恩義を受けた日本人よりボアソナード教授に敬意を表す」と書かれているのは、まさに日仏関係親善の希求が背景にあってのことなのである。

＊3）ここまでの日本国大使館の移動については、外務省外交史料館「第二次歐洲戰爭関係一件／在留邦人保護避難及引揚関係 第一巻」の「巴里立退の前後」に詳しい。

フランスの北半分と西海岸はドイツが直接占領、残りはヴィシー政権（État français、エタ・フランセ）が統治していた。この状況下、日本は、フランス領インドシナのうち中国国境周辺に限った日本軍の駐留をハノイの現地フランス軍及びヴィシー政権に打診。フランス側は8月30日にこれに同意、9月23日に日本軍はトンキン州に進駐する*4。

また、フランスの敗北を見て、日本は、ドイツとの同盟に活路を見出す。日本には少なからず慎重派も居たようであるが、9月27日、日本はドイツ・イタリアとの軍事同盟条約に署名する。いわゆる日独伊三国軍事同盟である。ヴィシー政権は日本にとって今や同盟国のドイツの影響下にある政府となり、日本は、1941年7月にフランス領インドシナの共同防衛のためその全域への日本軍進駐を要求、孤立無援のヴィシー政権はこの要求を受諾する。このいわゆる「南部仏印進駐」が、アメリカ・イギリスの日本への石油禁輸などの厳しい経済制裁の引き金となり、1941年12月の太平洋戦争開戦へとつながっていく。

ところで、1951年のアメリカ映画「GO FOR BROKE!」*5をご存じだろうか。第二次世界大戦中に編成され、米軍内で最初は好奇の目、ともすれば差別的な目で見られていた頼りないアメリカの日系人部隊が、祖国アメリカへの忠誠を尽くし欧州戦線で果敢に戦い抜くという話である。アメリカは、1941年12月の太平洋戦争開戦後、強制収容所への収容など日系人を厳しく扱った。しかし、1942年6月、米国は、日系人収容への批判をかわし日系人を自国民として扱うためハワイ中心の日系人部隊である第100歩兵部隊を編成する*6。同部隊は1943年8月北アフリカに上陸、9月にはイタリアに上陸しローマを目指す。実は、イタリアは9月初め、連合国に降伏したのだが、その動きを察知したドイツ軍に北半分を占領されており、第100歩兵部隊はドイツ軍の頑強な抵抗に遭って激しい戦闘を余儀なくされていた。一方で、ハワイ出身日系人を中心にアメリカ本土出身日系人も加わった第442連隊も編成され、1944年5月末にイタリアに到着。6月、第100歩兵部隊は第442連隊の傘下に置かれる。この第442連隊は、引き続き厳しい戦闘を行いつつ、7月末には斜塔で有名なピサの辺りまで進む。

さて、話はここで約二ヶ月弱遡る。舞台は、1944年6月6日、D－Dayと呼ばれるこの日のフランス北西部ノルマンディの海岸。アメリカ軍、イギリス軍、カナダ軍そしてイギリスに亡命していたフランス人部隊などからなる連合国軍が午前6時半、上陸作戦を始める。筆者は20年前、上陸作戦の舞台の一つであるオマハビーチのドイツ軍要塞跡を見たことがあるが、浜の後ろの崖の上に極めて頑強に作られていて、遮蔽物のない遠浅の浜を上から一望でき、上陸した連合国軍が破滅的な状況に陥ったことがすぐに想像できたし、一方で、人数・物量で劣るドイツ軍が薄暗い要塞内で絶望的な気持ちで反撃を行ったことも頭に浮かび、その場から逃げ出したい気分になったのをよく覚えている。最終的に連合国軍の手に落ちたノルマンディの海岸からは兵員・物資が大量に陸揚げされ、ノルマンディ上陸作戦から約1ヶ月後の7月7日、ノルマンディの中心都市カン（Caen）が連合国軍の手に落ちるも、7月末までに連合国軍が占領できたのは実はノルマンディの一部にとどまる。しかし、8月初旬、ノルマンディの南側に回り込むことに成功した連合国軍は、パリへの進撃のスピードを速め、パリ陥落は時間の問題になってくる。

そのパリに居た日本人は何人くらいであっただろうか。第二次世界大戦開戦により日本に帰国し相当減ったとはいえ1940年段階でパリ在住日本人は160人を数えていたといい、また、1942年に戦前の在仏日本人会が作成した名簿にはドイツが占領していた地域を中心に123名の名前があるという*7。日本国大使館関係者としてヴィシーに十数名が居たと思われることを考慮すると、幅はあるが100人強から140人強の日本人がパリに居たのではないか。そして、パリ解放後もパリに残留した日本人はフランス外務省によると少

SPOT

＊4）これを「北部仏印進駐」という名で呼ぶため、あたかもフランス領インドシナの北半分を日本が占領したかのようなイメージがあるが、実際は日中戦争の作戦遂行を念頭に置いて、最北部にあるトンキン州（ハノイ周辺）の日本軍の通行許可、4飛行場の使用許可とそれに付随する日本軍（上限6千名）の駐留等を認めたものであり、フランス領インドシナ全域の日仏共同防衛を目的とした翌年の「南部仏印進駐」とは目的も規模もかなり異なる。

＊5）これから話に出てくるアメリカ第442連隊のモットーで「当たって砕けろ」の意。元々は、賭け事に関するハワイの俗語的表現で「有り金を全部賭ける」の意味だったという。

＊6）昨年は日仏修好通商条約締結160周年であったが、1868年に約150名の日本人移民がハワイに移住したハワイ日系移民150周年でもあった。

＊7）和田桂子・松崎碩子・和田博文編「両大戦間の日仏文化交流」（ゆまに書房）42頁。

なくとも39名（パリ周辺含む）、日本の外務省によると80名[*8]とされているので、60名程度がパリ陥落直前にドイツに向けて避難したのではないかというのが、筆者による大胆な試算である。

パリ陥落を前に、彼らのうち40名弱は、ドイツの軍用列車によってパリ東駅からベルリンに脱出した。しかし、連合国軍の快進撃の報に呼応した鉄道運転士のストライキで出発は丸一日遅れた8月14日となり[*9]、苦難の逃避行の末、一行はベルリンにたどり着いている。それ以外は、何組かで車に分乗し、ドイツに脱出している。

ヴィシーでは政権の崩壊が間近に迫っていた。8月20日、ドイツ軍に強いられ、ヴィシー政権のペタン主席は意に反してヴィシーを後にし、フランス東部、ドイツ国境間近のベルフォール（Belfort）に向かう。ヴィシー政権の事実上の終焉である。三谷隆信駐仏日本国大使を始めとするヴィシーの日本国大使館員やその家族もこれに従って同日、ヴィシーを発ち、23日にベルフォールに到着している。ただ、収容能力の問題があり三谷大使と一部館員以外は、ベルフォール北方、ヴォージュ山中のジェラールメ（Gérardmer）に移り、そこでパリの領事館から避難してきた一部館員と落ち合う。さらに、ベルフォールにも連合国軍が迫ったので、9月8日、ペタン元主席は故国フランスを脱しドイツ南西部のジグマリンゲン（Sigmaringen）に移り、三谷大使ほか日本国大使館員も10日にジグマリンゲンに移るのである。

さて、このほかにほとんど知られていないもう一つの逃避行がある。在マルセイユ領事館の逃避行である。現在のマルセイユ総領事館のホームページを見ると、1944年8月18日、当時の高和博領事の引揚げとともに領事館が閉館となった旨が書かれている[*10]。これは、8月15日にフランス南東部のカンヌ（Cannes）からサントロペ（Saint-Tropez）一帯に連合国軍が上陸し、マルセイユに迫ってきたことが背景にある。マルセイユの「解放」は結局8月28日となったが、それに先立ち、まさに8月18日、高和領事ほか2名が中立国であったスペイン目指して南西に車を走らせるも、8月19日、スペイン国境すぐ手前の町ペルピニャン（Perpignan）で戦闘に遭い立ち往生してしまう。ペルピニャンは上陸した連合国軍からかなり遠い距離にあったものの、同日、ドイツ軍が撤退を始め、そこにレジスタンスや共産党員が蜂起したのである。ペルピニャンの警察内の分子は武器をレジスタンスらに与えて支援したのだが、ちょうどその時にマルセイユ領事館一行はペルピニャンの警察に保護と援助を求め、説明もないまま拘束されてしまうのである。翌20日朝にはペルピニャンが「解放」されるのであるが、一行は、21日、解放前にドイツ軍が牢獄として用い、解放後は対独協力者の監禁に用いられたペルピニャン要塞に移され、9月9日にはホテル[*11]に移され長期にわたり軟禁状態に置かれたのである[*12]。

高和領事達が軟禁されたホテル跡（ダニエル・タバール氏提供）

SPOT

＊8） フランス側が1945年8月21日に作成した日本国籍保有者リスト（フランス外務省外交史料館資料E216-1中の1945年8月21日内務大臣から外務大臣（アジア大洋州局）宛書簡）にはフランス全土で45名（パリ周辺を含めパリで39名）が掲載されている一方、後述する1945年6月の残留日本人向け救恤金支出決裁書（外務省外交史料館蔵）によると、パリに80名、マルセイユに20名が残留していたとある。
＊9） ちなみに出発予定日の8月13日に、列車での脱出組にはパリの日本食料理屋兼ホテル「牡丹屋」から弁当の差入れがあったとのこと。現在筆者が居住するパッシー地区のモザール通りにあったというので気になっていたのだが、前掲「両大戦間の日仏文化交流」（ゆまに書房）42頁に掲載されている在留日本人名簿の写真に牡丹屋の経営者の住所が124 Avenue Mozart（16区）と出ており、ここに牡丹屋があったのである。
＊10） 日本国在マルセイユ総領事館ホームページ「Jean-Pierre BOEUF氏の覚書き」の「(3) 第二次世界大戦前後のマルセイユにおける日本」。
＊11） フランス外務省外交史料館の資料E184-1中の1944年9月12日付高和領事からピレネ=オリアンタル県知事宛書簡ではHôtel de la Paixに移されたとある。また、このホテルは宿泊料の請求を同県に対して行って断られ、赤十字国際委員会に陳情した結果、同委員会からフランス外務省に1945年4月25日付で書簡が発出されているが、そこにはホテルの名称・住所がHôtel Restaurant de la Paix, 1 rue Quéya à Perpignanと書かれている。
＊12） フランス外務省外交史料館の資料E184-1中の1944年12月27日軍事保安局司令官宛メモ。

1944年の状況（国境線は現在のもの）

現在のブリュイエールの町並み

アメリカ第442歩兵連隊通りの表示

ここで話は再びアメリカの日系人部隊に戻る。日本の領事館が閉館となり、また、連合国軍に「解放」された直後の9月30日のマルセイユ、ここにイタリア前線を離れてナポリを発った日系人部隊第442連隊が上陸してきたのである。彼らの次なる任務は、未だドイツ軍占領下にあるフランス東部の「解放」であった。第442連隊は、ローヌ川を遡り、約800kmを貨車と徒歩で移動し、半月後の10月15日、フランス東部ヴォージュ山中の小さな町ブリュイエール（Bruyère）の「解放」作戦に投じられるのである。

この町は、ナンシー（Nancy)、エピナル（Epinal)、ルミルモン（Remiremont)、サン＝ディエ（Saint-Dié）そしておよそ一ヶ月前までヴィシーとパリから避難してきた日本国大使館員が滞在していたジェラールメからの道が交わるヴォージュ地方の交通の要衝である。また4つの小高い丘を背後に抱え、大づくりな風景の多いフランスにあって、何とは無しに箱庭的な日本の風景を想起させ、懐かしい気持ちにさせられる町でもある。しかし、そうした細かい地形だけに天然の要害ともなっていて、ドイツ軍が頑強に抵抗しており、そこで第442連隊に白羽の矢が立ったのである。町の入り口にあるA高地と名付けられたビュエモン（Buémont）の丘と町のすぐ裏手にあるB高地と名付けられたシャト（Château）の丘は、10月18日に第442連隊が激戦の末押さえる。翌19日、D高地と名付けられた町の東方のアヴィゾン（Avison）の丘も占領するが、この丘はドイツ軍に一度取り返された後、20日、第442連隊によって奪還される。また、この20日、C高地と名付けられた町の北方のポワンテ（Pointhaie）の丘も占領している。同時並行的に、ブリュイエールの街中でも激戦が繰り広げられていた。文字通りの市街戦で家を一軒ごとに解放していくという戦いだったため、多数の死傷者が出た。同連隊の属する第6軍集団司令官のジェイコブ・ディヴァース中将が「欧州での米軍の前進全体の中で、ブリュイエールは最もひどい戦闘の場として記憶されるだろう」と述べるくらいの激戦だったのだ。一方で、ブリュイエールの町民は、避難して籠っていた家々の地下室から出てきたときに、第442連隊の20歳未満の若くて背が小さい日系人兵士達を見て少年達がやって来たと勘違いしたという。しかし、日系人兵士たちは思いやりと敬意で町民達を扱い、命令に反して自分達への配給糧食を町民達に分け与え、町民たちは日系人兵士たちを「ジェントルマン」と名付けたという。ま

た、同連隊の栄誉を讃えて町外れには「アメリカ第442歩兵連隊通り」と名付けられた通りがあり、さらにこの戦闘が縁で、ブリュイエールとハワイのホノルルが現在姉妹都市になっているというのはちょっとした余談である。

さて、戦闘で疲弊していた第442連隊には休息の暇すら与えられなかった。まず、第442連隊の下にあった第100歩兵部隊他はブリュイエール東方の村ビフォンテヌ（Biffontaine）に向かう。現在では、75年前に戦闘があったことなど微塵も感じさせないのどかな農村であるが、この小さな集落の解放を巡っても激戦が繰り広げられる。10月22日から23日にかけて、ドイツ軍からこの村を「解放」するが、その後も3日にわたってドイツ軍から攻撃を受け続けたという。町の中央にある教会には、当時の銃弾の跡が残っており、また、その入口には「1944年10月23日　この教会の扉の左にて負傷した第100部隊の英雄の一人ヤング＝O・キム大尉が捕えられたがチネン氏とともに逃げることに成功した」というプレートもかかっている。

そして、10月25日には、疲れきった第442連隊は、彼らの名前を不朽のものとしつつも多大な犠牲を払うことになった「失われた大隊」救出に向かうことになる。現場はビフォンテヌ村の一集落レパクス（L'Epaxe）東方の小高い山中、尾根を進軍していた第141歩兵連隊第1大隊、通称テキサス大隊252名が、10月24日、小屋峠（Col des Huttes）から妖精岩（Roche des Fées）にかけて、ドイツ軍700名に包囲され、食糧・飲料も尽き、わずかな弾薬のみしか残っていないという危機的状況に陥ったのである*13。第442連隊の10月26日からの戦闘は凄惨そのものであった。深い霧に覆われ鬱蒼とした森の中、見えない敵からの攻撃にさらされつつ、局面を打開するために銃剣での突撃を繰り返してドイツ軍の塹壕を一つまた一つと奪い、5日目の30日、やっとテキサス大隊の解放に成功するのである。このときのテキサス大隊の残存兵力は211名、それを救うのに第442連隊が払った犠牲は死傷者863名という甚大なもので、後日、同連隊が直接所属していた第36師団の師団長ジョン・アーネスト・ダールキスト少将が謝意を示すため同連隊を閲兵したとき、自分の目の前に整列した兵士の数が少ないのに驚き「連隊全体を見たいと頼んだはずだ」というと、失われた大隊救出作戦で第442連隊を率いたバージル・ミラー中佐が「連隊の残りは彼らだけです」と答えたという逸話も残っている。

ビフォンテヌ村レパクスから失われた大隊の森のある山を望む

筆者は戦闘があったのとほぼ同じ季節の昨年11月3日から4日にかけて、ブリュイエール、ビフォンテヌそして失われた大隊の森を訪ねた。ブリュイエールの町から第442連隊通りを通って山に入っていくと、かなり行った森の中に第442連隊の顕彰碑がある。「各々の国家への忠誠は元々の人種によって変わることはないという歴史的事実をここで改めて確認したアメリカ合衆国陸軍第442連隊戦闘団諸君へ　祖先が日本人であるこのアメリカ人達は、1944年10月30日、ブリュイエールの戦闘の間、ドイツの防衛主力を突破し、敵に4日間にわたって包囲された第141歩兵大隊（ママ）を救出した」と記されている。

失われた大隊の森は、11月ということもあり「Chasse en cours（狩猟中）」という看板が出ている中での訪問となった。発砲音も時々聞こえ、当時の兵士達に比べれば全然大したことはない、とは思いつつも、誤射されるのではないかとの若干の恐怖心を抱きながら山道を歩き、小屋峠を少し下った開けた場所にたどり着くと、猟銃を抱えた一団がちょうど猟を終えて休憩している。これで帰りは不安に怯えなくても済むと安心しながら、そこに建てられている顕彰碑を見ると、フランス語で「第38テキサス師団第100歩兵部隊と第

＊13） 一方で、包囲した側のドイツ軍も、自分達が、アメリカ軍の先頭を行くテキサス大隊の後方を遮断して包囲していたとは気づかなかったという話もある。

SPOT

442前戦連隊、第141戦闘連隊歩兵大隊の勇ましいアメリカ人兵士達は、我らの地を解放するためここに雄々しく散りぬ　1944年10月」とあった。この辺りは第442連隊がテキサス大隊を解放した場所なのである。近辺には針葉樹が鬱蒼と茂り、戦闘当時も濃霧だったことを物語るように岩々は苔むしていて、しかもこの季節は底冷えもする。散策するには良い場所で、今は戦跡を訪ねるハイキングコースも設定されているのだが、当時壮絶な戦いがここで繰り広げられことを想像すると、今更ながらに平和の有難みを感じるのである*14。

ここで、パリに話を戻す。1944年8月中旬、フランス人と結婚し家庭を有しているといった理由で最終的にパリ残留を選択しパリから脱出しなかった日本人は、8月25日のパリ解放により、一日にして同盟国人から敵国人となった。9月6日、フランス臨時政府の植民地大臣から外務大臣の同意を得た上で内務大臣（国家治安警察局）に対しパリに居住する日本人の拘束要請が行われるが、警察は罪を犯していないと拘束できないと慎重で、40名と見込まれたパリ居住者のうち、第一波として拘束されたのは6名であった*15。その後さらに1人が拘束される一方で、年末までに5人が釈放されたようである*16。フランス臨時政府は、日本人を拘束しない場合、アメリカ等の反発が生じることを予想しつつ、日本軍が駐留するインドシナに多数のフランス人が在住していたため日本人を拘束した場合に日本側から報復されることも恐れており、結果、ごく少数の拘束者以外は地区の警察が日々、日本人の存否確認を行って監視を行うという形をとった。しかし、拘束されずとも、残留日本人は経済的に困窮し、日本の外務省は1945年6月、残留日本人（パリ80名、マルセイユ20名、ベルギー20名とされていた）を経済的困窮から救うため救恤金86,400スイスフランの支出を決裁したりもしている*17（ただし実際に残留日本人の手に渡ったかは不明）。また、第一次世界大戦後からパリに住んで、日本人芸術家を支援し、パリ国際大学都市の日本館建設に私費を投じるなど文化支援活動を行っていた薩摩治郎八もまた経済的困窮に陥る。彼については、1936年から駐日フランス大使も務めたアルベール・クラメールがフランス外務省に金銭的支援を要請*18、フランス外務省は1945年5月から薩摩に毎月資金を貸与している*19。また、当時のフランスのチュニジア総督シャルル・マストは、薩摩との長い友情関係に基づいて、フランス外務省に対し、彼が日本国籍を有していることによりフランス居住に不都合が生じることがないように要請している*20。

1945年5月以降、警察による在留日本人拘束の第二波が始まる*21。8月時点の日本人45人のリストの内、マルセイユ領事館の3人も含め、監禁された日本人の人数は18人に上っている*22。パリ周辺では、監禁場所には、フランス占領時にユダヤ人移送のためドイツが設置した「ドランシー収容所」が主に使われていた。これに対し、薩摩は、監禁された者の釈放に向けフランス外務省に働きかけたりしているほか、何人かのフランス人も釈放に向けて同省に対し嘆願を行って

＊14）ブリュイエールの観光案内所パンフレット「Bruyères Honolulu... Un jumelage hors du commun」（https://fr.calameo.com/books/000430870dbf10ec3ca90）はアメリカでの編成時からの第442連隊と第100歩兵部隊の行動と活躍について、地図入りで分かりやすくまとめてある。
＊15）フランス外務省外交史料館資料E216-1中の1944年9月6日植民地大臣から内務大臣宛書簡及び1944年10月26日付メモ。
＊16）同上E216-1中の1944年12月7日付メモ。
＊17）外務省外交史料館「大東亜戦争関係一件／交戦国間敵国人及俘虜取扱振関係／一般及諸問題／在敵国本邦人救恤問題 第一巻」の「1．要救恤ノ実態及ソノ対策関係／3．在欧邦人救恤ニ関する件（20．6．6高裁案ヲ含ム）」。
＊18）フランス外務省外交史料館資料E216-1中の1944年11月9日付外務省外国フランス事業部メモ。
＊19）同上E216-1中の1945年5月2日付外務省アジア局から薩摩治郎八宛書簡。
＊20）同上E216-1中の1944年12月14日付マスト総督からフランス外務省アジア局長宛書簡。同総督は、日本への駐在経験が長く、クラメール駐日大使と同時期に日本に駐在武官として赴任していたこともある。また、ドイツのフランス侵攻時にフランス軍北アフリカ第3師団長としてフランス東部で戦い、降伏後ナチに捕らわれドイツのケーニッヒシュタイン要塞に投獄されるも、彼の友人で、パリ・ヴィシーの日本国大使館の駐在武官だった沼田英治陸軍大佐が要求して彼が釈放されたという話もあるという（アンリ・クイユ著「戦争日誌　ロンドン～アルジェ　1943年4月～1944年7月」261頁（《Journal de guerre Londres-Alger avril 1943-juillet 1944》par Henri Queuille）及びフィリップ・ヴァロド著「ペタンを取り巻いた人々の運命　1945年から今日まで」第5章の3.「レジスタンス下の陸軍（l'armée en résistance)」（《Le destin des hommes de Pétain de 1945 à nos jours》par Philippe Valode）の二冊を合わせ読むとそういう結論になる）。その後、マストはヴィシー政権下の第19軍団参謀長として、密かに連合国軍に協力しその北アフリカ上陸を助け、亡命政権を率いていたシャルル・ド＝ゴールからチュニジア総督に任命されている。
＊21）一方の日本側の動きであるが、日本軍による1939年の北部仏印進駐及び1940年の南部仏印進駐後も、フランス領インドシナにおけるフランス植民地政府は統治機構として保たれ、日本軍とフランス軍が共同防衛に当たる体制をとっていた。しかし、1944年8月のヴィシー政権崩壊により、インドシナのフランス軍がド＝ゴール率いるフランス臨時政府寄りの行動を採ることを恐れた日本軍は、1945年3月9日、インドシナのフランス軍を攻撃しこれを武装解除してフランス領インドシナを完全に支配下に置いた（いわゆる明号作戦）。また、その後、日本本土でも、在日フランス人が警察に拘留され、軽井沢などに軟禁状態で置かれた。
＊22）同上E216-1中の1945年8月21日内務大臣から外務大臣（アジア大洋州局）宛書簡。

いる*23。

次に、パリにあった日本国大使館や関係機関の建物の取扱いについても若干触れたい。ヴィシー政権崩壊時に、在仏日本国大使館は中立国スイスの在仏公使館に対し、日本国大使館や関係機関の建物の管理を託しており、その結果、在仏スイス公使館はフランス臨時政府や連合国に対しこれらの建物への立入りを拒否していた。その後、スイスはフランスとの間で外交特権との関係で状況を整理し、1945年2月、日本の大使公邸・大使館事務所・陸軍駐在武官事務所・海軍駐在武官事務所・日本人会事務所はスイスの保護下に置かれる一方、例えば南満州鉄道パリ事務所はその保護下には置かれないという形で分類し、前者には、誰も中に入れないよう在仏スイス公使館の手で封印を行うこととされた*24。1945年5月にヴィシーにあった日本国大使館の動産がパリの大使館事務所に運び込まれ、1945年11月17日に至り、在仏スイス公使館とフランス外務省の間で調書が作成され、同日付でスイスの保護下に置かれていた日本の不動産・動産がフランス外務省に引き渡されることとなった*25。

最後に、ドイツに脱出した在仏日本人達のその後である。まず、三谷駐仏日本国大使及びその一行の館員は、フランス軍が迫ったのを受けて1945年4月21日、ジグマリンゲンを後にし、4月23日にスイスに入国、25日に在スイス日本国公使館のあるベルンに到着している。また、ヴィシーにいた館員のうちベルリンの大使館に勤務したのちベルンの公使館に転勤となった者等もいる。これらスイスにいた外交官は、1946年1月23日になってようやくベルンを後にし、1月29日にナポリを船で発って、マニラで乗り換えた後、3月26日、日本の浦賀港に帰り着いている。ペルピニャンに軟禁されていたマルセイユ領事館一行もニースに向かってスウェーデンからの引揚組と合流して日本に帰国したとされており*26、彼らも3月26日に日本に到着したのであろう。

次に、ドイツに残留した者達である。1945年4月にベルリン近郊のブランデンブルク州マールスドルフ*27城等に避難していた日本人の一団には、フランスからの避難者も含んでいたが、同城は5月4日にソ連軍に占領される。同城にいた日本人は、ソ連がまだ日本との間で中立条約下にあったことが幸いしてソ連軍に拘束されることなく、5月18日に同城からベルリンに向かうことを指示され、続いて、5月20日朝、ベルリンの日本国大使館に籠城していた大使館員も合流し*28、ベルリンから列車でモスクワに向かう。5月25日、モスクワ到着、同日発でシベリアに向かい、チタにて列車を乗り換えて、6月3日、ついに旧満州（中国東北部）の満州里に到着、その後、一部は当時の新京（現在の長春）に残留、残りは朝鮮半島の羅津から船にて日本に向かい6月29日、敦賀に到着している*29。また、ベルリンにいた外交官はドイツ降伏前にドイツ外務省からオーストリアのバードガスタインへの移動を指示されており、フランスからドイツに避難した外交官や民間人の一部もバードガスタインに移ったところ、ドイツ降伏後の5月に米軍に抑留され、7月又は8月にアメリカに連行されている。そして、太平洋戦争終結後の11月24日（又は25日）に日本に向けて帰国している*30*31。

SPOT

＊23） 同上E216-1中に薩摩治郎八他の嘆願書がいくつか残されている。
＊24） フランス外務省外交史料館資料E184-1中の1945年2月20日及び2月27日付在仏スイス公使館のエイド・メモワール。
＊25） フランス外務省外交史料館資料E184-1中の1945年11月17日付在仏スイス公使館・フランス外務省の間の調書。
＊26） フランス外務省外交史料館資料E184-1中の1946年2月26日付内務大臣から外務大臣（アジア大洋州局）宛書簡。
＊27） 現在、ヴィーゼンブルク／マルク自治体のレーツという小村に属する集落である。
＊28） ここには、湯本武雄海外駐劄財務官（ドイツ・イタリア）及び有吉正大蔵事務官の二人が含まれている。なお、元々大蔵省の海外駐劄財務官はイギリス・フランスを担当しロンドンに駐在していたが、第二次世界大戦開戦後は、ドイツ・イタリア担当となり、ベルリンに駐在していた。湯本財務官は、1944年4月22日、フランス領インドシナにおける軍費支払のヴィシー政権との打ち合わせのため、ヴィシーにも来ている（外務省外交史料館「他官庁官吏ノ出張関係雑纂　第二巻」の「8．大蔵省」）。
＊29） 外務省外交史料館「第二次欧州大戦関係一件／在留邦人保護避難及引揚関係 独、墺の部　第二巻」。なお、フランスからの避難者はドイツのメクレンブルク州シャルロッテンタール（現在クラーコー・アム・ゼー自治体に所属）にもいたが、こちらは5月2日にソ連軍に占領された後、5月12日ソ連軍派遣の自動車に乗せられ、5月17日ミンスクに到着、5月18日に鉄道でモスクワに向かい5月19日にモスクワ着、5月28日満州里着、5月31日新京着の日程で移動している。
＊30） このバードガスタインから日本への帰国に至る情報は、前述の「牡丹屋」の経営者の義理の親族のフランス人が、彼が1944年8月のパリ脱出の後バードガスタインに居たという情報を得て、彼がドイツのゲシュタポに捕らえられた義理の親族のフランス人の解放に尽力したという話も引きながら、フランス外務省に彼の安否を問い合わせ、それを踏まえてフランス外務省が在仏アメリカ大使館及びアメリカ国務省に問い合わせて得た回答に記述されている（フランス外務省外交史料館資料E216-1中の1945年7月12日付外務省個人事務局のメモ以降の一連の資料）。なお、「牡丹屋」の経営者はその後パリに戻り同じ場所で「ぼたんや」を再開したようで、三島由紀夫は「『夜の向日葵』あとがき」で1952年のブラジル・欧州旅行の際、パリでは「アヴェニュー・モザール（モーツァルト）一二四番地」の日本人経営のパンシォン（Pension，賄い付ホテル）「ぼたんや」に宿泊していたと記している。
＊31） フランス留学中にパリの大使館に外交官補として雇われ、戦後は東京大学教養学部フランス分科初代主任教授・教養学科長を務めパスカル研究の第一人者であった前田陽一や、有名バイオリニストで戦争当時パリにおいて活動していた諏訪根自子も、1944年8月にパリを脱出し、ドイツに避難した後は、最終的にこのバードガスタイン、アメリカ経由の逃避行を経ている。

今回の原稿は、元々、日仏修好通商条約に関する記事を書くため、フランス外務省外交史料館で調べものをしていた時に、1944年のパリ解放以降の日本との関係を記したフランス外務省の資料の存在にたまたま目が留まったことがきっかけで書き始めたものである。また、別の機会に、同じ1944年にアメリカ日系人部隊第442連隊が、フランス東部で激戦を戦い、現在でもなお最多の勲章を受けた部隊として知られていることも知った。まったく同じ年に、日本からインド洋を越えてやって来た日本人が遠いフランスの地で困難な状況に置かれ、日本から太平洋を経てアメリカに移民した日本人の子孫が日系アメリカ人として大西洋を越え同じフランスの地で困難な従軍に直面するという、歴史の偶然に感慨を覚えずにはいられなかった。

しかし、このエピソードを書いていて筆者が本当に気づかされたのは、戦時下の大変な状況にあって、困難に直面した人を助けようという同胞同士や国籍を越えた人々の勇気ある行動である。パリ脱出時やドイツ滞在・避難時に日本国大使館職員が邦人保護に努めたのは職務上当然のことではあろうが、ドイツに捕らわれたフランス人の解放に努めた日本人、パリ解放後に敵国人として捕らわれた日本人の解放に努めた日本人やフランス人、そしてフランス人を解放し厳しい戦いの後にもかかわらず自らの食料も渡したアメリカ日系人部隊といった話があったことも知るにつけ、75年の時を経た今でも「厳しい状況のときこそ他者を助ける勇気と思いやりを」と教えられたようでならない。

（注1）文中意見にわたる部分は筆者の個人的な見解であり、筆者の属する組織の見解ではありません。
（注2）高和領事達が軟禁されていたペルピニャンのホテルは現在はなくなっているが、当時の建物は現存しており、ペルピニャン近郊在住で「明治と共和国」（République＆Meiji）という仏日友好団体を主催するダニエル・タバール（Daniel TABART）氏に写真を撮ってもらい提供して頂いた。タバール氏に改めて感謝の意を表したい。

〈参考文献〉
フランス外務省外交史料館資料E184-1及びE216-1
日本の外務省外交史料館資料
足立邦夫著「臣下の大戦」（新潮社）
和田桂子・松崎碩子・和田博文編「両大戦間の日仏文化交流」（ゆまに書房）
ブリュイエールの観光案内所パンフレット「Bruyères Honolulu... Un jumelage hors du commun」
アメリカ合衆国陸軍軍事史センターホームページ中の「CHRONOLOGY OF EVENTS442d Regiment Combat Team1-31 October 1944」
（https://history.army.mil/html/topics/apam/442_chrono.html）

SPOT